



『わらの楯』(作・演出：渡山博崇)



『かもめ』(戯曲：アントン・チェーホフ、脚色・演出：吉田光佑 a.k.a.SABO)



『MANGAMAN』(作・演出：ニノキノコスター)

Review Part 1

劇作家とつくる短編人形劇

名古屋の若手劇作家が人形劇に挑戦する「劇作家とつくる短編人形劇2017」は今年で3回目を迎えました。

今回の3作品の共通点は、重要なシーンほど俳優の身体(言葉も含む)に頼っていたのではないということです。本企画のコンセプトを考えると、重要なシーンこそ人形劇の表現を取り入れることではないのでしょうか。人形劇の特長のひとつは「見立て(=想像力を喚起させる表現)」です。人形を出すことが人形劇ではなく、例えばモノに生命を感じさせるとともにある瞬間にはモノに戻る、あるいはキャラクターの内面が顔の表情に視覚化されることなどが挙げられます。他にもEテレの「ねほりんぱほりん」が成功したように、ある対象との距離をとるため、その間に入ることも人形にしかできないことです。生身の身体ではないからこそ、より想像力が膨らみます。

『かもめ』は人形劇界では取りあげにくいチェーホフに挑戦した意欲作でした。限られた時間の中で原作の面白さを伝えるのは難しかったと思います。ストーリーに関係なく人形の存在が時間の経過とともにどんどん希薄になっていたことは残念でした。『MANGAMAN』は「漫画マン」と「MAN我慢」の二重の意味を持ち、漫画のネーム(コマ割り)をパネルシアターの要素と重ね合わせてテンポよく展開させていました。冒頭のパネルを使ってたくさん絵を登場させて観客を一気に引き込むことに成功し

ていたにもかかわらず、クライマックスとなる主人公のユウコを助けるシーンが俳優の身体表現に集約されていました。観客の想像力をかき立てる人形劇的表現を選択されなかったことが少し悔やまれます。『わらの楯』は人形と遣い手の関係性をそのまま物語の主人公に重ね合わせた作品でした。物語の構成が人形劇的で興味深かった反面、「人形劇のための人形劇」というには人形劇の本質をもう少し掘り下げる必要があったように思います。

しかしながら、これらの作品は現在の人形劇界では決して生まれません。そこに価値があり、人形劇にまったく関心がなかった観客層に対して、その存在を伝えたことにも意味があります。名古屋から発信される新しい試みがいづの日か日本中に広まっていくことを願っています。

いいだ人形劇センター 木田敬貴

人形とモノに翻弄され：！？

新進作家3人が



「人形劇」とは何か

——1年半後に得た答え

Review Part 2

Stuffed Puppet Theatre Mathilde マチルダ



「人形劇」とは何か。人形劇に関わる私たちは、いつもそのことを考えています。「人形劇」にしかできないことは何か。2016年2月、オランダを拠点に活躍するStuffed Puppet Theatreのネビル・トランター氏の人形劇ワークショップが開かれ、私も参加しました。私を含め参加者にとって最も目からウロコだったのは、「感情を入れずに人形を操作する」ということでした。つまり、人形の動きはすべて論理的にできていて、論理的な人形の動きが最も効果的に感情を表現する、ということ。人形の平行運動=時間・空間の変化、人形の上下運動=感情の変化、人形の静止時間=思考のプロセス、人形の目線=意思の表れ、といったふうに、すべての人形の動きにはルールがあるというのです。さらに人形劇に欠かせないのは人形美術。ネビルは自身の作品の人形美術も手掛けますが、その人形はただそこにあるだけで意思があるように感じます。彼は「人形を200%信じている」と何度も言っていました。「人形を信じ、人形がどのように動きたがっているのか声を聴く。そうすると、自然に物語が動き始める」。ワークショップから1年半後、ネビル・トランター作・演出・美術による「Mathilde マチルダ」を観て、私は「人形劇とは何か」に対する一つの答えを明確に見つけることができたように思います。舞台は老人ホーム。そこで暮らす老人たちはみな、記憶を失いつつも、余命わずかであっても、生きる目的があって生きています。ダウン症の老いた妹の世話をすることが生きる目的であった兄、その兄と一緒にいることが生きる意味であった妹。一緒にダンスパーティーに行くことと約束したまま戦争で離ればなれになった、かつての恋人を待ち続けることが生きる目的であったマチルダ。彼らはあ

瞬間から、黒い衣装の遣い手が見えるようになります。彼らには黒い衣装の遣い手が誰なのかはわからない。しかし、妹を老人ホームに預けたのち、兄は黒い衣装の遣い手に静かに連れて行かれます。重力に逆らうように必死に懸垂する102歳のマチルダも、ふと黒い衣装の遣い手の存在に気付きます。そして薄らぐ意識のなかで、遣い手と静かにダンスを踊る。帰ってこなかった恋人との約束を果たすように。人形に命はありません。しかし物語の中で人形たちは、絶望や怒りや愛に満ちています。命のない人形が「生きる目的」によって生かされているならば、人形の遣い手はまさに「生きる目的」そのものです。マチルダを遣うネビルが離ればなれになった恋人に見えてくるのは、ネビルがマチルダの人形をただ動かしていたのではなく、彼女が何のために生きていたのかを表現していたからではないでしょうか。この発見は、私にとってとても新しいものでした。さて、このことを舞台上で表現するには、やはり論理的な人形操作の基本が必要なのでしょうね。

愛知人形劇センター理事 弓達聡子

主催事業のご案内

こまきまんだら 小町曼茶羅

常磐津三味線が弾き語る、小野小町の放浪譚。お米のあきた小町、東北新幹線スーパーこまち、ミス小町コンテスト、小町石鹸、小町化粧品! 美人伝説にひそむ穢れ(けがれ)を描く、三味線弾き語り人形劇。三味線太夫vs人形遣い、クラウン、俳優連合。果たして舞台は如何に... ぞうご期待!



10月27日(金) 19:00、28日(土) 14:00/19:00、29日(日) 14:00
損保ジャパン日本興亜人形劇場ひまわりホール
前売2100円 当日2400円

スタッフ

作・演出：木村 繁 人形・舞台美術：福永朝子(人形劇団むすび座)
振付：工藤鏡道 照明：平野行俊(劇座) 音響：スズキカズマ(オレンジスタ)
プロデューサー：中 康彦(損保ジャパン日本興亜人形劇場ひまわりホール)

キャスト

三味線弾き語り：常磐津綱鶴(ときわつづなほう)
人形遣い：ゆみだてさとこ/桑原博之(Puppet Theaterゆめみトランク)
中島由紀子(avecビーズ)/LONTO(クラウンファミリーレジャーB)

ひまわりホール 子どもアートフェスティバル 2017

五感で楽しむフェスティバル

今年もひまわりホール子どもアートフェスティバルには人形劇はもちろん、音楽、ダンスなど全国から集まったたくさんパフォーマンズが登場します。フェスティバルに初登場するのは、P新人賞2016を受賞した影の色彩ワンププロジェクトのワヤン操者とガムラン奏者によるマジカメジカ。ガムランの不思議な音色とワヤンを操る伝統の技、本場のインドネシア影絵芝居に楽しく触られます。また、ヨーロッパの民族楽器バグパイプや手回しオルガンの音楽パフォーマンスも初登場。なかなか生で聴くことのできない楽器にぜひ出会ってください。名古屋では数少ない喃家のひとり、雷門福三さんの「こども寄席」では、落語を聞くのが初めてでも思わず笑っちゃうこと間違いなし! 他にも、体を動かして楽しく参加できるダンスワークショップや、舞台作品に触れるのが初めての小さい子どもたちでも安心して観られる人形劇など、2日間たっぷり家族で楽しめるプログラムです。観劇チケットは6作品券と11作品券があり、ひとりたくさん観ても、家族やお友だちとシェアしても使えます。今年も、ひまわりホール子どもアートフェスティバルへぜひお出かけください!



10月8日(日)~9日(月・祝)
損保ジャパン日本興亜人形劇場ひまわりホール and 損保ジャパン日本興亜名古屋ビル
1作品鑑賞チケット...400円 6作品鑑賞チケット...1500円
11作品鑑賞チケット...2500円
※6作品・11作品鑑賞チケットは、ローンチケット・愛知人形劇センターホームページ、愛知人形劇センター事務所に買い求めいただけます。